

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「発達障害の子どもの育て方」



「発達障害いのわが子が笑顔で自律する育て方」(著者：西川裕子・西川幹之佑)の中から、指導・支援の参考になる部分を紹介します。

1 こだわるべきは、「診断名」ではなく本人の「特性」

診断名はあくまでも息子の一つの側面であり、全てではない。心掛けたことは、「この子はADHDだから」「ASDだから」と診断名を通して子どもを見ることが、本人の個性や特性を見失わないようにすることだった。

2 特性は誰にでもある

発達障害は濃淡の問題だけで、全ての人に何かしら傾向がある。日本の障がい観の問題点の一つは、障がい者とそれ以外という二分する見方にある。「それ」と「それ以外」という見方をやめれば、差別は生まれないはず。

3 療育選びの5つのポイント

①ゴールを決める、②無理をしない、③複数比較して選ぶ、④専門家の質を吟味する、⑤中身よりも人で選ぶことである。この中で特に大切にすることは⑤だった。どんなに素晴らしいプログラムを提供していても、この人から学びたいと子どもが思わない限り、スタート地点に立てない。

4 息子への「接し方」を変えたら見付かった魔法の言葉

「無理してほめようとしていることが分かると、逆にバカにされてた気持ちになる」と息子に言われた言葉で目が覚めた。声掛けの仕方や内容よりも、まずは信頼関係が大切だということが見えてきた。「この人にほめられたい」と思っていなければ、どんな言葉も響かない。周りの人に言うとき喜んでくれる言葉、私も言われたらうれしい言葉、それは「ありがとう」「大好きだよ」だった。この言葉のすごいところは、相手の期待が一切ないということ。相手が泣いていても、うれしいときでも、あなたが大切だと伝えることができる。

5 子どもは共感してほしいくて話している

子どもは親に何かしてほしいから話すわけではなく、ただ話を聞いてほしい、自分がそのときにどう感じたか、どう思ったのかをそのまま受け止めて聞いてほしかっただけで、忠告や説教は無用なのだと分かってきた。親が子どもの言葉に共感し、一緒に同じ方向を向いてあげるだけで、子どもは自分で解決策を探すことができるようになる。



6 「しちゃだめなこと」だけでなく「してもよいこと」も明示する

特性のある子の中には、悪気はないのに、人の会話に入り込むこともあるので、幼く見えたり、わがままな子に思われたりする。目に見えなくても境界線の存在を教えること、年齢相応に応じた振る舞いを時間がかかっても「だめなこと」を「教えるのではなく、「してよいこと」を通じて伝えていくことが大切である。



とれたて直送便



「どの道を選ぶかより、選んだ道をどう生きるか」

容易な道と困難な道あったら、困難な道を選んで歩きなさいと聞いたことがある。人生にはたくさんの選択肢がある。しかし、ベストは存在しない。選んでくよくよするよりも、選んだ後どうするかによって、良くも悪くもなり得るもの。大切なのは、選んだその後である。